

## 徳川斉昭と伊達宗城(四)

——嘉永元年の往復書翰(一)——

河 内 八 郎

前号に続いて、紹介する書翰は嘉永元(弘化五年二月二十八日改元、戊申、一八四八)年に入る。

この年、前水戸藩主徳川斉昭(四九才)は、弘化元年十一月の謹慎解除以後引続いて、海防意見を発表する。

一方、宇和島藩主伊達宗城(遠江守、三二才)は、前年弘化四年五月二十三日宇和島に帰城以来在封しているが、三月三日に参勤のため宇和島を發ち、四月七日に江戸に到着している。

この年の書翰では、前宇和島藩主伊達宗紀(伊豫守)が、前年に引続いて、北方を中心とする海防問題や琉球問題についての報告や意見を斉昭に、しきりに送っていることが注目される。それに関連して、伊達宗城は、斉昭との意見交換をふまえ、七月に、松前志摩守昌広の内地転封を老中阿部正弘に建言するに至る。

またこの年、宇和島藩にとっては、高野長英(文化元・五・五〇一八〇五生)の城下入り、滞在がある。弘化元年六月三十日未明、江戸伝馬町の獄舎の火災で「切放し」になったまま行方をくらまし、江戸から上州へ、さらに仙台・福島・米沢を転々、再び江戸に戻って、嘉永元年四月二日宇和島に着き、翌二年一月初旬まで滞在した。すでに伊達宗城と接触があったことが縁であるが、この宗城と長英との関係は、宗城が斉昭への書翰の中で示している洋学や外国事情の関心と無関係ではない。

三二、嘉永元年正月五日 伊達宗城書翰、徳川齊昭宛（以下典拠に\*印を附す）

\*『事修叢書 九上、伊達公往復書簡』所収、但し、宇和島伊達文化保存会所蔵写本による。

『藍山公伝記 一』所引

密翰拝呈仕候、春寒未退之候御坐候処、先以閣下益御万福被成御超歳、御規式杯如御嘉例可被為済、重畳恭賀無量、奉南山候、其後ハ久々不奉伺御動静、多罪之至、奉恐縮候、旧冬ハ追々御賢子様方御養子杯被為在候趣相同、如何計御安慮可被為在ト奉大賀候、扱又春來相至候テハ、弥万端御都合御宜敷、御開運之御義ト無此上奉大賀、御吉左右昼夜奉待居申候、旧冬ハ両田共減祿退隠相成候由、無已次第残念奉存候、乍然無異ニ而珍重御坐候、時節相待候外無御坐、惡結義も阿閑ヨリ内令ニ而減祿、御咎被仰付候由、愉快至極奉賀義ト雀躍仕申候、奸賊窮迫ニ付テハ、別而惡計周旋可仕ト遙察仕候、有志之面々ハ弥張目之時ト奉存候、将又幕府御新令モ近来不相同、其内浦賀御手当、バツテイラは御造立ニ可相成哉ト伝承仕候、乍御延引何卒是非出来候様有御坐度、小ヨリ大ニ移ル外ハ無御坐候、大船ハ追而ニ可相成、其所ハ乍憚遺憾千万、今更可奉申上様も無之候、扱又菊・庄共至テ壮健、迎陽仕候間、御放念被為在度奉存候、為義も蘭方炮術修行之義、家僕共疑念不相含筋ニテ都合仕、先頃ヨリケウエル手前稽古仕申候、尤全体ハ直ニ大銃打方、並ニ秘書杯モ為見度心得ニ御坐候得共、為ニ限り是迄ノ流義定ヲ不相用、最初ヨリ取扱格別ニ仕候テハ、又人口モ如何ト心配仕候間、乍不本意藩士同様之扱ニ仕居申候、尤出精次第出格之取扱ハ、外人疑惑も無之候間、次第ニ依リ早ク伝授杯モ仕候様可相成、此段ハ申上置度奉存候、実事申聞不苦事ニ候ハ、大ニ致能候得共、兼々御沙汰之趣御坐候間、僕ハ御存知不申振合ニ仕置申候、先ハ右等ノ義申上度、草略之紙面御仁恕奉希候、恐惶謹言

早春初五

二白、為ヨリ奉呈一封度趣ニテ差出候間奉呈候、将又僕儀当月望日ヨリ、東南領海岸島々台場處為巡見出船仕候間、<sup>⑥</sup>

其間御疎遠可奉申上ト、重畳恐怖奉存候、二月初旬ニハ帰城可仕含ニ御坐候、是迄祖先以来不罷越海路島々故、別テ万事手数相懸申候得共、二月ハ水夫之嫌候月柄故、早々罷歸候へきニ御坐候、拟參府モ四月中仕候様被仰出、難有仕合奉存候、右ニ付来ル上巳ニ出船仕候、何事モ後雁奉申上候、恐々頓首百拜

密呈、御直披奉願上候

① 弘化四・九・十一、七男昭致（七郎麿）一橋家を嗣ぐ。十二月一日慶喜と改名。

弘化四・十一・二十八、十男昭音（十郎麿、武聡）松平武成（石見浜田藩主、弘化四・九・二十卒）の嗣子となる。

② 両田は、水戸藩士戸田銀次郎忠敏（蓬軒）と同藤田虎之介彪（東湖）。戸田・藤田は、弘化元年五月の幕命による斉昭の致仕・謹慎とともに、役義召放塾居を命ぜられていたが（戸田は年寄、藤田は馬廻頭上座側用人）、弘化四年十月二十四日、反対派の結城朝道（寅寿）を禄半減・慎隠居、子一萬丸へ家督五百石を与える処分を加え、遠慮中の戸田・藤田両名の処分を解き、隠居を命じ、戸田の子亀之介に一五人扶持、藤田の子建次郎に七人扶持を与えて、家禄を復活した。（『水戸藩史料』別記下、卷二十二、五三六頁、及び卷二十六、七六六頁）

③ 結城朝道（寅寿）（前註②）が阿閼（老中阿部正弘）の命により処分されたこと。（『水戸藩史料』別記下、卷二十六、七六一頁）（前註とともに、前号「三〇」書翰、註①参照）

④ 軍艦建造についての斉昭の意見は、本誌第十号「六」書翰など。

⑤ 宇和島に滞在中の水戸藩士菊池為三郎重善と、その臣庄兵衛。前号の「二五」宗城書翰、註①参照。次に「為」とあるのも菊池のこと。

⑥ 宗城は正月二十日に、領内西宇和矢野保の巡視に出発、三十日に帰城した。（『藍山公伝記 卷一』）  
⑦ 上巳（三月三日）。宗城は予定通り三月三日に宇和島を発って、参府の途に上っている。（同前）

内容 一、斉昭子息の各家養子入りを祝す。

一、水戸藩内紛争の処置、とくに結城の処分を喜ぶ。

一、浦賀防備、軍船建造についての幕府の新法の予想

一、菊池の近況。壮健にて蘭方砲術の訓練を受ける。

一、菊池よりの斉昭宛書状を伝う。

一、領内台場巡見と参府発途の予定

三三、(参考書翰) 嘉永元年正月十四日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

・『聿修叢書 九上』所収、但し、同前

内密奉貴酬度、乍憚書副奉謹呈候、旧冬御函面拝見、難有奉存候、外ニ御書面内密拝見、重々難有御礼申上奉り候、早々返上可仕所、御函面写愚息へ差遣候様御沙汰も御座候間、段々延引相成、漸写仕舞、今日返上仕候間、慥ニ御落掌被成下候様奉願上候、遅延之罪以大量御仁恕被成下度奉希候、並弊邑ノ函面、慥ニ落手仕、早速悴方へ差遣候事ニ御座候、扱又、薩州一条ノ尊慮之趣ハ、遂一奉感服候、別而薩主自身琉国へ渡海、防禦致候事ハ、実以乍恐 御英断、左ても有之度、夫程ニ実意、自身死生ヲ極メ、憤発防禦仕候場ニ至候ハ、夷狄も容易ニ寄付不申、兎ニ角骨折候事ヲいとゐ、高枕ニ而物事苟安ニ流れ候間、愈其虚ニ乗シ、武威ヲ夷狄見透し候様相成、恐入候事ニ御座候、如 尊慮相成事ニ候ハ、自然と夷狄も容易に近寄不申、日本之武威被見透ニ而も無之、愈以餘事ハ周海岸武威嚴重之備ニ身ヲ入候様相成候得ハ、弥夷ニ防禦手厚ニ可相成、左様相成候得ハ、萬々一渡来改候而もヲクレヲ取候事も無之、愈以夷狄も近寄候事ハ不安心ニ存候様成、自然と海岸静謐ニ可至、如只今ニ而ハ、後事ハ是非共如 尊慮色々難題申懸、終ニハ四方八方ノ患ヲ生シ可申、誠以可悲事ニ御座候、後年ノ所相考候而ハ不安心之至奉存候、扱又修理大夫へ過日対会仕候所、只今ノ所ニ而ハ琉球人数も相増、大ニ静ニ相成、安心と申おりハ私竊ハ中々左様ノ時合とハ一同不申候得共、近臣ノ者も居合セ候間、夫成ニ承置候所、修理ハ安心と申しからぬ事と私ハ奉存候、先ハ過日之御礼重々申上度、書副乱書恐入候得とも、此段申上奉り候、決而御書附之義他へハ堅秘仕候間、乍憚此段ハ 尊慮易被思召可被成下候、頓首謹言

正月十四日

二仲、拝見ノ御書附慥ニ返上仕候、乍恐御落手可被成下候、恐々拝上

別紙拜上

① 修理大夫ニ鹿兒島藩世子島津斉彬

内容 一、旧冬斉昭より送付の図面（領国図か）を宗城に見せ、本日返上。一方宇和島領の図面を返納受く。

一、鹿兒島（薩摩）藩の琉球防備策についての斉昭の意見。

一、島津斉彬は琉球の情勢に樂觀的なるも、やはり不安なり。

三四、（参考書翰） 嘉永元年三月十三日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

・『聿修叢書 九上』所収、但し、同前

御別紙被成下、奉謹読候、然ハ修理方へ 尊諭被成下候節、尊答早速ニ奉申上候所、旧年以来両三度 尊翰被成下候所、一切尊答不奉申上、如何ノ事ニ候哉、委細承り受候事も候得ハ、極密申上候様奉畏候、阿閣、修理苟ニ仕候義ニハ失敬之至、恐入候事ニ奉存候、私ニハ如何之訳ニ御座候哉一向見聞も不承、何レ極密何となく承り候事ニ御座候ハ、早速ニ可奉言上候、私相察候所ハ、琉国一條ニ付てハ修理考通りても不参申、何歟近頃ハ色々修理ハ琉国之事なと申候事、甚一家内心配出来候様ニ被相察、已ニ私事も昨年中ハ暫之間文通面会共内々相断、当年ニ至候而ハ対面文通も又如已前ニ仕候而宜敷由ニ付、近頃ハ又文通も仕候得とも、琉国一条ヲ色々同人ハ申候而ハ、何歟一家父子役人ノ内ニも不相好様子、夫故度々文通甚当惑致候哉ニ相察申候、右様之事ニ而、閣下 尊翰等被成下、右御請度々申上候、御心配ニ而も右之事ニハ無御座候哉と奉察候、何分実事の所ハ承知も不仕候得とも、若私如察ニハ無之哉と奉存候、過日私球国ノ事相尋候所、先無事ニ而、何も此節ハ無変事様ニ相咄申候、其内是ハ極密、私相咄候とハ、琉国ニ滞留ノ夷人今ニ帰帆も不致、所詮自彼方又々何等難題申懸ニ、渡来船可有之、人数も表向とは違、至而人数も差遣候者共少く、始終ハ手ニ合かね候様可至と申居、とても薩ノ人数防禦ハ行届キ申間敷、随分勇氣ノ者御座候由ニ候

得共、役人ニ兎角穩便ヲ第一ニ望ミ候もの主張仕居候事と奉存候、何レ極密無何と見聞、追々可申上候と奉存候

一、大隅滞国之事云々、奉謹承候、異舶ノ事ニ相違ハ有之間敷様承知仕候、其内表向ノ願達振等ハ一席なから承知不仕、私共承知仕候ハ、從 上秋参府候様御沙汰と計承知仕候、是又何等餘ニ見聞仕候事御座候ハ、極密可申上と奉存候、何歟甚六ヶしき事ニ相成候半、近来薩上下一般ニ参り兼候様子被察申候、極密御請大乱書恐入候得共、申上奉り候、其内又何等承り候ハ、可奉申上候、早々謹言

別紙御請

三月十三日

① 修理Ⅱ島津斉彬、なお、大隅Ⅱ鹿児島藩主斉興

② 昨弘化四年以来、斉昭より、琉球問題につき再三書状を島津方へ送ったのに対し、島津斉彬の態度がにえきらないことは、宗紀の先の書翰（前号の「二八」、「二九」）にもみえる。

③ 弘化三年四月に琉球那覇に来航、上陸して滞留し続けている医師ベッテルハイム B. J. Bettelheim のこと。（前号「四〇」書翰、註①参照）

内容 一、薩摩（島津斉彬）の態度に不安。

一、鹿児島藩内には内訌あり、それも不安。宗紀とも文通が回復しているが、事情は好転せず。

一、大隅守（島津斉興）の滞国、参府延期は、鹿児島藩内の難事の為かと案ず。

三五、（参考史料） 高野長英関係蘭書目録

・（一）・（二）二点、宇和島伊達文化保存会蔵、伊達家文書『御重書目録「乙」の「図書類」』（原本）

『高野長英全集 第四卷』所収

(1)

(貼札、異筆)

「譯業必要書籍目録

(自筆)」

(表紙白紙、但シ、右肩ニ註記アリ)

「高野長英自筆歟」<sup>①</sup>

譯業必要之書籍目録<sup>②</sup>(豎冊子)(傍註( )は『全集』本)

○辞書類 オールデン。ブウケン。

○マアリン<sup>人</sup>辞書

○ハルマ<sup>人</sup>同上

○ドーフ。ハルマ同上

右ハ先年和蘭加比丹ヘンデレキ。<sup>(ト)</sup>ドーフ<sup>人</sup>名久敷西港淹留中

候 俗にドーフ。ハルマと唱来候

台命ヲ奉し 通事と計りハルマ氏ノ辞書を翻訳仕

卷数忘失仕候

貳冊

同

○ボイス辞書

右ハ諸方貯蔵家多有之候 分部若狹候<sup>③</sup>ニ老部 不用之分此節有之候事と被存候

十冊

○ニイウエンボイス同

右ハ水越候又巢鴨老候ニも有之候<sup>④</sup>

卷数忘却仕候 但シ十五六冊と覚候

○シヨメイル同

卷数貳十冊計と覚候

諸家貯蔵多と被存候 薩州公も必ス御蔵書と被存候

○ウエイランド同

十冊

諸方蔵書多と奉存候得共 忒部御注文之方可然と奉存候

○ミリタイレ。オールデンブック

卷数未タ詳ナラス

右ハ兵家辞典ニ而 司天台ニ<sup>⑥</sup>忒部官蔵有之様承リ居候 此分ハ是非御詔奉祈候

○独逸国辞書

貳冊

上卷ハ独逸辞本文和蘭辞註文。下卷ハ和蘭辞本文独逸辞註文

○拂朗西同

貳冊

上ニ準ス

右ハ小冊之分巢鴨老侯ニ有之筈 右ニ而も宜敷

○啖咭喇同

貳冊

右ハ翻訳相成候分 司天台ニ有之筈 又過年鈴木春山も所蔵之處 同人物故後 箕作阮甫方へ遺候由 但し全備<sup>⑧</sup>

之ものニハ相見得不申候 忒部原本御詔奉願候

○独逸書読法并語脈解

壹冊

右ハ「レイルブック。デル。ドイツタアレン」と唱候 御詔奉祈候

○拂朗西書同

壹冊

右ハ「レイルブック。デル。フラスターレン。」と唱候 此分ハ先年数度見当リ候 齋来多くと被存候 去年も

尾州名古屋ニ而目撃仕候 但し今ハ如何相成候ヤ



○啖咭喇書同

卷冊

右ハ世間多く有之ものニ候 小冊之分尤多見当リ候 右ニ而も宜敷

通計辭書類十四部

凡ソ大部ノ兵書其外精審之珍本ハ和蘭國語にて訳し候もの甚乏敷と奉存候 仍て右三国之辭書類具備仕候得は如何様ニか刻苦研究致し 直ちに三国の原本に就て和解仕り可指上候

○陸軍兵官類

○タクチイキ。デル、デリイワアペン<sup>⑨</sup>

右ハ三兵配合活用ノ術にて 戰鬪法の軍中指揮使に属スル要務ヲ記載仕候 フロイセン 李瀾生國の總兵大隊中のマヨール官ヘインリフ。ホン。ブランド、人 著述致候 水越侯其他ニも藏書之由 近頃写本も諸処ニ有之候得共 壹部原

本御詔奉願候

○ハンドブック。ホール。ヲツヒシイレ

卷數未詳

右ハ軍中指揮使要務ノ小本と申事ニ而 リウレ。ホン。リ、ンステルン<sup>名</sup>人 著述之由 未タ渡來無之と被存候 但シ諸書中殊ニ証ヲ此書ニ取り相唱へて兵家ノ規矩と仕候 独逸、拂朗西、英吉利等何國の書にても不苦候 何卒 壹部御詔奉願候

○其他「タクチイキ」ハ歩騎礮の三兵共に有之候故 右の類何にても宜敷

○エキセルシチイ、ジュ。カハルレリイ。

右ハ騎兵教練法

○エキセルシチイ。ジュ。アルチルレリイ。

## 右ハ礮兵教練法

○エキセルシチイ。ジユ。インハンテリイ

右ハ歩兵教練法にて 其内ソルダアト、スコール」と唱候歩兵使銃法ヨリ ペロトン。バタイロンの二隊操法迄  
合巻と相成候分多有之候 巢鴨老侯多分蔵書之筈 又水越侯も所持と被存候

○「フルデイジギング、エン、ア、ンハルリングスキュンデ」

右ハ攻守術にて城堡砦營其他陸戦一切之戦闘法にて 一隊の主將の職務ニ属し 上之「タクチイキ」に比スレバ  
一層上等の術ニ有之候 未タ齋来無之と奉存候得共 何国之本にても宜敷是非一本具備仕度候

○ヘルドヘイル、キユンスト

卷数未詳

右ハ將帥術と唱候本にて 大総兵ノ掌ル主務ヲ記シ候 本邦七書の類に当り可申と被存候 迎も和蘭語ニハ有之  
間敷 但シ独拂咲三国にハ必ス有之筈 何卒壹部奉願度候

○軍中士官の書籍

○ヲールロフス。ボウキユンデ

卷数未詳

右ハ軍中營造術と申事にて 城郭砦堡其他兵舎柵塹等ニ至迄 凡ソ軍中一切ノ营造法ヲ記載仕候 全備之書ハ未  
タ目撃不仕候 壹部御注文奉願上候

○フルステルキングス。キユンスト

右モ大抵同本ニ候得共 殊ニ陣營ノ造法詳に記し候 巢鴨老侯并に水越侯ニも蔵本之由 過年写本少々一見仕候  
是又壹部御詔奉願上候

○ヘルドジインスト。ホール、ヲツヒシイレ

式部

右ハ軍中指揮使戰場要務と申事にて ヤハリ陣營造法ヲ審記仕候本に御座候 先年雲藩庄司郡平と申もの所藏之  
所 同人物故後真田侯ニ御讓申上候筈 是又老部御詔奉願度候<sup>⑪</sup>

右通計三部

○水戦兵書類

○アドミラル、セネラルのジインスト」とか呼候

老冊

右ハ水軍都督要務と申義にて 軍艦中諸兵ノ操練法ヨリ一切ノ水軍諸務ヲ詳記仕候 是又同人方ニ先年貯藏致し  
居候処 只今ハ如何相成候ヤ 右又老部御詔奉願候

○シケイプス。ボウキユンデ」

卷数未詳

右ハ諸船造法ノ書にて 先年 水府公御藏書之大本老冊拜見仕候 薩州又ハ佐賀公定メて御藏本と被奉存候

○ゼイアルチルレリイ

右ハ海軍礮兵要務ノ書にて 諸家藏本多く 且ツ先年 官にて翻訳被仰付候得共 未タ全備之訳ハ相成申間敷ヤ  
と奉存候 巢鴨老侯ニモ写本御所持之筈 水越侯も一式部有之由ニ伺候

右通計三部

尤大抵右等にて可然と奉存候

其外

○薩州家御藏書ハ先年 三位様御在世中余程御買上ニ相成候筈 右之分此節 若殿様一切御預り之由 尤近刻之兵書

類ハ如何と奉存候得共 辞書類ニハ御富被遊候由伺居候 何卒 御借請被為遊候様仕度候  
右之通奉申上候 以上

① 高野長英の宇和島入りについては、

村松恒一郎述『高野長英宇和島潜伏中の事実』（一九一二年十二月十八日温故会講演速記録、東京大学史料編さん所蔵、旧文部省維新史料編纂事務局所蔵図書）。

高野長運『高野長英伝』（一九二八）

鶴見俊輔『高野長英』（朝日評伝選1、一九七五）

なお、宇和島藩の「夏 嘉永元戌申歳大扣 御用場」の、当年四月二日の条には

「一、富沢礼中江戸へ被着帰下着候段相達候事

但、江戸大坂へ之添状ハ月並飛脚ニ通達在之ニ付、別段無之事

一、蘭学者伊東瑞溪と申者、兼而御呼下之筈ニ候処、此度富沢礼中同船ニ而、昨夜及深更、上下式人致着候ニ付、差向候処、町会所江差置度旨若年寄江相達候ニ付承置、町奉行承知も申聞候事

一、右同人着ニ付、諸事吉見左膳申合、差向相談ニ而不差支様可取計旨、元々江申聞、左膳承知之義申聞候事

一、右同人逗留中御門入之義、不差支様可取計旨、御目付へ申聞候事」

などという記事がある。宗城が秀れた蘭書翻訳者を求めていたことは、前号の「二八」書翰にもみえるが、伊達家にも出入りしていた佐賀藩医伊東玄朴の仲介で『夢物語』の著者長英とも、すでに二回はど会見しているという（村松前掲の講演）。

そして今回の宇和島入りは、家老松根図書と連絡のとれた逃亡中の長英の引きとりを、宗城自身の在国中（弘化四年五月二十三日より翌嘉永元年三月三日）に決めて、手はずをととのえたものと考えられる。富沢礼中（大眠）は宇和島藩医で、その下国に伴なわれて、伊東玄朴門人伊東瑞溪と変名した長英が、宗城と入れ替りに四月一日深更宇和島に入ったのである。

なお、参府中の宗城は、宇和島へ向う富沢と瑞溪（長英）の一行と、宇和島藩大坂屋敷で会っていると考えられる（高野前掲書、五四七頁以下、及び鶴見俊輔前掲書）。『藍山公伝記 一』にも、このいきさつは記されている。

② この「目録」は、長英が、宇和島で、主として兵書の翻訳にあたる際に必要と考えられる書物を一覧表にして、伊達宗城に提出し、購入や諸家からの借用を求めているもので、「辞書」・「陸軍兵書」・「軍中士官書」・「水戦兵書」の四種から成っている。

なお、高野長運編『高野長英全集 第四巻』に、同じ「訳業必要之書籍目録」が、原本の体裁をそのまま示す凸版で掲載されている。編者は「今尚侯爵伊達家に此書の真筆の一卷を所蔵せられるが、編者にも同じ自筆の書を保存している」と解説して

いる。両者の体裁は、形態、丁数、一頁の行数等全く同一であるが、片カナの濁点等に一、二の異同がある。

③ 分部若狭守光貞||近江国大溝藩主、二万石

④ 水野越前守忠邦||老中（天保五・三・一―同十四・閏九・十三、遠江国浜松藩主）、老中再任（弘化元・六・二十一―同二・二・二十二）、子忠経（後忠精）は弘化二・九・二出羽山形へ一万石減の五万石で転封。

⑤ 巢鴨老侯||退隱後駒込の水戸藩邸にある徳川斉昭のことであろう。

⑥ 司天台||幕府の天文台、起源は元禄二（一六三九）年渋谷春海の建設にかゝり、本所から神田駿河台に移り、八代將軍吉宗代に神田佐久間町の司天台となった。一時廃止されたが、明和二（一七六五）年牛込に再興され、天明以降浅草片町にあった。

⑦ 鈴木春山（享和元||一八〇一―弘化三||一八四六）||田原藩（三宅氏）医、名は強、字は自強。渡辺崋山と親交あり、天保六年兵学の研究のため長崎に遊学、帰府後高野長英の協力で、フォン・ブランドの「三兵戦術書」（Heinrich von Brandt: Grundzüge der Taktik der drei waffen, Infanterie Kavallerie und Artillerie, 1831）を蘭訳から訳し、天保十年頃完成して『兵学小識』とした。（佐藤昌介『洋学史研究序説』二〇六頁、及び三三三頁）

⑧ 箕作阮甫（寛政十一||一七九九―文久三||一八六三）||津山藩医、宇田川玄真門下の蘭学者、幕府天文方翻訳員。

⑨ 前註⑦の H. von Brandt 著。高野長英は、宇和島へ下る前から本書の翻訳をおこない、一年足らず宇和島滞在中を経て、広島經由鹿児島へまわった期間に訳したものである。これも和蘭訳からの重訳であるが、『三兵答古知幾』として、晩夢楼主人の名で安政三（一八五六）年に板行された。（『全集』第三卷所収）

⑩ 庄司郡平（生没年月日未詳）||松江藩士、一二〇石、定江戸組付。同じ松江藩士望月兔毛を通じて華山に接す。（佐藤前掲書、二〇三頁）

⑪ 真田幸貫||信濃国松代藩主、松平定信（榮翁）子、文政八年襲封。

⑫ 三位||島津重豪（延享二||一七四五―天保四||一八三三）||鹿児島藩主。進取的開国主義者といわれた蘭癖大名で、歴代オランダ商館長と親しくつき合い、博物学百科全書「成形図説」百巻などの編纂を命令する。天明七（一七八七）年正月致仕。次の藩主が子斉宣。嘉永元年当時の藩主はその子斉興（文化六年六月襲封）で、次に「此節若殿様」とあるのが斉興世子斉彬（文化六||一八〇九生）で、曾祖父と同じに蘭癖といわれている。

(2)

(端裏貼札、異筆)

「蘭書目録

(フセンハ自筆)①」

蘭書目録

(状)

チユツケイス著述 千八百十九年

一アールドレイクスキユンデ

スマルレンヒユルク著 千八百二十八年

一レールブツク デル シケイキユンデ

「分析術之稽古本 同上

一ウエイランド

「ウエイランド人ノ語典略と被奉存候

一ホウギール

「ホウキイル」ハ人名と相見得候、其記載仕候事不詳候

ソムメル著

一メルキワールヲゲ ベイゾन्दルヘイド

(「ハ下ゲ紙貼札、高野長英筆、次行ニ示ス、以下同ジ)

五冊

二部

二冊

四冊

五冊

一冊

四冊

「奇事記と申事ニテ、是又同上不詳候

一ステーンスタラー

二冊

「ペーボ。ステインステラア<sup>人ノ</sup>度学書ニ候

一子ーデルラントセ スタルメーステル

一冊

「和蘭馬医之書ニ候、珍本と被存候

一ゲシキーデニス デル フルエーニゲンデ ネーデルランデン

六冊

「和蘭七州併合之記事

シカルンホルスト著 千八百年

一ミリタイレサツクブツク

一冊

「兵学懷宝と称候小冊子

マツテウスシテリウス 千七百六十五年

一デテオーリーハン デ ヘスチングボウ

一冊

「営城学之書、好本と被存候

千八百十八年

○一レゲレメント オツブ デ エキセルシチーシ デル セイアルチルレリ

三冊

「海礮操練定法、珍本

ゲルデル著 千八百廿四年

一アルレルエールステ コロンデンデル セーフルキユンデ

一冊

「算術初学之書」

ヒラール著

○一ハンドレイチング トット デ ケンニス ハン ヘット シキツプ エン

デスセルフストイグ

「諸船并船中諸具を弁識仕候書、珍本」

一ハルマ

「ハルマ氏ノ語典、必用之書」

ヒュギニエユン著 千八百十八年

一フルハンデリング オトフル デ リコセツト スコーデン

「趨射法の書  
シヤクリウチ

一シカラーゲ

「シカラーゲ」ハ人名ニ而、其記載仕候事不審候

ウキルデ著 千八百三十二年

一ドイツランド

「独逸国之地理書ニも可有之や」

一ゾーフハルマ

「加比丹ゾーフ人」長崎ニテハルマ氏ノ語典ヲ和解仕候写本

一冊

二冊

一冊

一冊

一冊

十冊



一 ビュスコロイド

「火薬製法之書

スフラクロイクス著 千八百廿二年

一 ベキンセレン デル ゴニオメーテリー エン チリゴメテリー

「ゴニヲメイトル并チリゴメイトル」と申二測器之書

スフギシウスナンシンニク著 千八百廿七年

一 ベギンセレン デル ヘルドフルシカンシンク

「陣営興造法初学之書

ホルトロウフ著 千八百廿五年

○一子ーデルドイチエ エン エンゲルス ウヲールデンブツク

「和蘭と啖咭喇之語典、イギリス書ヲ読に緊要之書

セツセレル著 千八百廿三年

一 ハントブツク デル フルハールチギンク ハン エルンストヒユールウエルキ

「火具製造ノ書、既ニ過半訳本有之候

一同

カルテン著 千八百三十六年

一 セーアルチルレリー

「司天台ニテ翻訳出来仕候書

徳川斉昭と伊達宗城——河内

一冊

三冊

一冊

二冊

一冊

写本 一冊

一冊

フロイン著 千八百三十三年

一ミリタイルサツクブツク

「鈴林必携之原本

一マルチン

「マルチン名人之窮理書、今世ハ不用之本

千八百廿四年

一ギツツ・ホール・デン・オツヒシール・デル・インハンテリー

「歩兵指揮使手引之書、好本と被存候

シケルレル著 千八百廿四年

○一ケレインウヨールデンブツク デル ラティンセ・タール

「羅甸語ノ略本、ラテン語ヲ探索仕候ニ緊要之書

ヒユフ子ル 千七百四十八年

一スタートキユンチゲ ウヨールデンブツク

「政務ニ関リ候語ヲ集候書

ヒラール著 千八百廿八年

一ブルーヘーハン エー子 ハンドレイチング トツト デ ケンニス デル セー

アルチルレリー

「海礮法試験手引之書

一冊

一冊

二冊

一冊

一冊

一冊

ヒュキユエニン著 千八百十九年

○「フルハンデリング オーフル ヘット ゲプロイク ハン グルーイエнде コーゲルス 一冊」

「黄銅筒鑄造法之書」

エーメイリンキ著 千八百三十五年

「アルレルエールステ ベギンセレン デル シーキーユンデ 一冊」

「分析学ノ基本ヲ説候書」

「ボイス ヲールテンブツク 十冊」

「ボイス氏ノ語典、翻訳ニ極緊要之書」

「サーメンズ テルリング エン ステルクテ 一冊」

「諸国兵制兵教之書、即チ兵制全書之原本」

「マルカン 一冊」

「マルカン」ハ人名ヤと被存候、其記載仕候事不審候

千八百三十五年

「一子ーデルドイッ 一冊」

「和蘭と計ニて、其記載仕候事不審候  
チデルドイッ」

「一ペイタラゲン トット デ ナチエルキユンヂゲ 七冊」

「御蔵書ノ名、窮理学ノ補助と申題号」

千八百三十二年

一 エンゲルス

一冊

「英吉利と計り有之候、多分同国之語本にて可有之哉

ウイルデ著 千八百三十三年

一 子ーデルランド

一冊

「和蘭と計り有之候、是又多分同断と被奉存候

イーヒーピラール著 千八百三十七年

一 スチユールマンスキュンスト

二冊

「航海学之書

千八百四十年

一 アルマナツク エン ナームレギステル ハン 子ーデルランツインチー

一冊

「和蘭諸官人ノ番号并曆

ゲーアーハンゲルキウエイキ著 千八百二十年

○一フルハンデリング オーフル デ ワートル ハツスセン エン ヘット ゲブロイク

ハン デン バロメーテル トット ヘット メーテン ハン ホーゲン

一冊

「水平ヲ定メ井ニ驗氣管にて諸高度ヲ測リ候、珍本

イーエーボーデ著 千七百七十八年

○一ハンドレイチング トット デ ケンニス ハン デン ステルレンヘーメル

三冊

「諸星ヲ弁識仕候書、天問に要用之書

メイリンキ著 千八百三十五年

一 アルレルエールステ ベキンセレン デル シケイキユンデ

「分析学基本之書

マルステン著 千八百二十四年

一 マレイス字典

「印度諸島通用之語ヲ集候書

シケーリク著 千八百二十一年

一 ベウエーギング デル アルステン

「アルステンの語、恐クハ写誤にて難解候

一 ベギンセレン デル フルステルキングス キユンスト

「城砦築造法ヲ記し候書

一 ハンドブツキー フヲール カノニールス

「諸敵手必用ノ小冊子

◎一 ハンドレイチング フヲール オンドル オツヒシーレン

「軍中諸小指揮使の手引書、極珍本と被存候

○一 レゲレメント オツプ デ エキセルシチーン エン マヌーフレス ハンテ インハンテリー

「歩兵操練并変化法の定則、珍重

一 デ ケレイ子 オールロク イン デン ゲースト デル ニドウウユレ ケレイグス フーリング

一冊

二冊

五冊

四冊

二冊

七冊

四冊

一冊

「小戦并ニ晩近用兵ノ法ヲ記し候書

一オンドルウエイス イン デ ベウエーギング デル ラステン フョール アルチルレリステン 一冊

「礮兵諸具搬送運轉法ヲ教導仕候書

一ウョールデンブツク デル アルチルレリー 一冊

「礮兵語典

一バツテレイ 一冊

「礮牀礮台等の事ヲ記し候書と被存候

①一デ アーンハル エン デ フルデーチキング デル フェスチンゲン 一冊

「諸城攻守法、極珍本 ○

一ヘルドアルチルレリー 一冊

「野戦礮之書

一ギートウエーセン フョール デ メタールカノン 一冊

「<sup>ヤククマ</sup>烙丸ノ用法ヲ記し候書、珍本

一デリーウアーベン 一冊

「三兵タクチイキの書

一デリーウアーベン 二冊

「同上

一プロヒシヨール レグレメント 三冊

「騎兵操練定法、御藏書ニ被為有候

① 本書は長い巻紙で、一つ一つの書目の下に長細い附箋の下げ札をつけているが、その文言が高野長英の自筆である。鶴見俊輔前掲書、二七四頁に、その様子を写真で紹介している。

内容 この二点は高野長英の宇和島での業績を推測する史料であるが、前々号の「一二」（参考史料）に示した高島秋帆より押収の「蘭書目録」二点（このうちの（2）に長英の筆になる附箋が附けられている）及び「一三」（参考史料）に示した「蘭書目録」二点の計六点を関連させて考える必要がある。

三六、嘉永元年五月三日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 『事修叢書 九上』所収、但し、同前。

副啓拝呈仕候、先頃者御委曲之御返事御投与被成下、盟誦仕候、先以倍御安康御多祥被為在、恐賀無量奉南山候、其外蒙 御教示候儀奉畏候、事済候儀者、乍憚再度奉服不仕、御仁恕奉希候、藏書之蘭訳書四部之内、萬一御通閱不被為在書御座候ハ、可差出哉と奉相伺候処

三兵活法、二兵総説<sup>①</sup>

右両部ハ御電覽不被為在候ニ付、可差上旨被 仰出候趣奉畏候、然処、右二部之書も、外書物一同に海運に仕候故、未相達候間、到着次第早速奉呈座下候半、少々延遲ニ相成候段、御海量奉希候、扱又近頃阿芙蓉藥聞と申書、御密ニ御藏弃被為在候処、夷虜之情実も是にて能相分り、矢張追々御議論被為在候御卓見と、同意之儀ニ御座候由、書銘をも初而承知仕候位故、一見仕候義も無御座、何卒極密乍憚御恩借被成下度奉希上候、井蛙の僕手にも入兼候得共、尚又珍寄有用書手に入候ハ、早速可奉申上と奉存候、阿芙蓉云々、近日拝借伏而奉願候

一、追々航海之時節相至、去々月末々奥州並対州・壹岐之諸国へ帆影相見得候趣、年々ニ渡来時節早く相成申候、近

海崎陽にも不遠参可申、可惡可憂儀奉存候、不相替海防御新令も無御座、参府後見聞仕候而ハ、一年之間に世上弥増浮弄之惡俗に服し候様奉存候、乍憚歎息之儀奉存候

一、先日野父迄、ロイデル之記被相下候由にて、早速相伝難有仕合奉存候、毎度御懇篤之御儀、乍憚感荷之至奉存候、然る処、右書物ハ藏弃仕居候ニ付、野父より返呈可仕旨申伝置候間、可差上と奉存候、右御礼深厚申上奉り度、将ウヲルシキート製法書所持仕候哉御尋被成候処、右新發明之由にて、実に少々手に入候所、製法之義者何分相分り不申、猛烈之藥力、合藥にも可勝と奉存候、中々製方ハ弁別不仕、書付も所持不仕候得共、追々にハ相分り可申奉存候、奇藥と奉存候、兩條野父より可申申上と奉存候得共、為念申上置候

一、先日ハ為<sup>⑥</sup>御一封、早速差下申候間、此段奉申上候、去月初旬之家書、此間到来仕候処、兩人とも至而無異消光仕候間、乍憚御放慮被為在度奉願候、恐々頓首、謹言

五月三日

拜呈、御直披奉希候

① 宗城所蔵の蘭書提供の書状は所見なく、この四部の名は不明。ただし、この「三兵法」は、「三五」(1)(註⑨参照)にみえる「タクチイキ・デル・デリイワアベン」の「三兵法」、すなわち *Infanterie* (歩兵)、*Kavallerie* (騎兵)、*Artillerie* (砲兵) の三術書であろうが、「三五」(1) 註⑦の鈴木春山に「三兵法法」(弘化三年刊)なる訳書がある。「二兵総説」は同じ中にある「フルデイジギング・エン・ア・ンハルリングスキュンデ」*Vardediging en Aanvallings Kunst* (攻守術書)であろうか。

② 「阿芙蓉聞」塩谷世弘(甲蔵、宕陰)著、弘化四年自序、阿片戦争の記録及び論考。なおこの書の写本が宇和島伊達家文書に現蔵されている。『御重書目録「乙」の「図書類」』

③ 宗城養父伊達宗紀(春山)

④ 前々号「二三」(2)「御書物目録」にある、「ゲラルトフラン氏著、ヘット・レーヘン・デル・ミキシイルロイテル」(和蘭



船將ミシキイル・デ・ロイテル伝)

⑤ 火薬製法書か

⑥ 菊池為三郎(「三三」書翰、註④)

内容 一、蘭訳書四部の提供を申し出たうち、「三兵活法」・「二兵総説」の二部未見の由、呈覧に供せん。

一、「阿芙蓉集聞」なる外国事情書密かに借覧したし。

一、各地へ外国船出現し、長崎へも来航の可能性あるに、幕府の新令はなく、不安なり。

一、父宗紀へ「ロイテル伝」を下さるも、それは所持しあり。

一、「火薬製法書」所持や否やの問なるも、その新火薬の製法十分判明せず。

一、菊池ら無事。

三七、嘉永元年五月三日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛、極密風説書抜とも。

\* 『事修叢書 九上』所収、但し、同前。

極密奉申上候、昨秋蘭人申上候極密風説書抜、脇方に而密写仕候間、奉入 御密覧候、最早御覧可被為済と奉存候得共、差上申、御留置ニ而も宜敷、寢食不安之光景と承存候、恐々謹言

五月三日

極密拝呈

極 秘

一、エレス説話書中ニ有之候、ホンコン地の奉行、蒸気船フルテユレー船を以、舟山並唐国北方の湊江罷越候序、御当国江も可罷越由に御座候、尤広東ニ而混雑有之、手間取可申哉奉存候

徳川斉昭と伊達宗城(四)——河内

右之通り御座候、かひたん、よふせふる  
へかへり、きひかん

一、エケレス説話書中ニ有之候ニハ、ホンコン奉行、蒸氣船フユルテユルシーを以、舟山並唐国之北方湊に罷越候序、日本江も可罷越由ニ御座候、尤広東ニ而此節混雜仕、手間取可申哉

右ハ、先年阿片一條混雜之砌より、右舟山はエケレス商館ニ、唐国に相渡置候所、右約定年限相済、年賦銀も皆済ニ相成候間、エケレスより唐国江差返し候由、然ニ、広東ニ而、エケレス少々混雜も差発候儀も為有之由ニ候得共、右ハ小事ニ而事ゆへなく相済候由、右等之末ニテ、本文之通エケレス唐国北なと蒸氣船ヲ以乗越候趣ニ候、右之折柄、日本海上も乗試候積ニ可有之由

一、去年渡来之フランス船之義ハ、国王より差図を請、日本江乗渡候儀ニ無之、全船大将之心得にて乗渡候との事ニ候由

一、日本人外国江漂流之者有之、御禁制国ニ候得は、紅毛人・唐人間江相頼、送り越候御作法ニ有之候ニ付、天保之度フランス船より日本江漂流人送来候得共、御請取無之、紅毛人・唐人間江相頼可差越旨、天保八年久世伊勢守殿長崎奉行在勤中、紅毛人江御諭書被相渡、フランス人江相達候様と申渡、則相達候由之所、日本之御作法といへ共、彼国之作法有之候ニ付、唐・紅毛人なと江相頼、差送り候義ハ難致旨相答候由

右三ヶ條は、此度入津之紅毛船出帆以前ニ咬啮<sup>カ</sup>吧にて承伝候趣申出候ニ付、御奉行所江申立候所、右等之風説之義、曾而不洩様、若相洩候而ハ、下々事情も不相弁、色々風評ニ相成候得は、人氣ニも相障候間、和解方等も年番手元にて成丈相認、兎角人数之手ニ渡り不申候様、尚又江戸表江不申越候内猶更之義に候間、精々相心得可申旨ニ候間、右之趣ハ相心得呉候様ニとの旨申出候、然ニ蒸氣船ニ而軍艦挽せ、日本江乗渡候比合之義、且広東混雜之次第等相尋見候所、乗渡候比合ハ、紅毛人も計兼候得共、当年又は来年にも可相成哉との事ニ有之由

一、かひたん江咬啗<sup>カ</sup>吧役人より掛合書翰之内、エケレス人日本江渡来之上、通商之義幾応も相願候心得ニ有之由、然ニ唐国ニ而ホンコン湊ハエケレス商館之場所共相渡置候所、土地の者共頻ニ乱妨ニおよび、右は唐国頭役之者差図にて、態と乱妨ニ為及候事ニも可有之哉との疑有之由、右等之訳合ニ而日本渡来ハ延引可仕哉

一、エケレス人唐国にて唐船ヲ借請、乗試として広東より右船を仕出し、咬啗吧表江乗参候義杯有之、いつれ之考合ニ而、不弁利之不乗馴唐船を乗廻し候哉疑敷、日本之通商是非共申取候合共ニ而、唐国之船乗試候儀共ニハ有之間敷哉との評も有之由

一、イギリス人・アメリカ人江、紅毛人ヲ以日本再渡不致様、御諭書を以、紅毛人より相達候様、御役人より被申渡之儀相伝候由ニ候所、一国之主と相成候上ハ、其国王より直ニ申談候義、イギリス並外国之作法ニ有之ニ付、取用不申との事ニ候、右等之含有之段、最前日本渡来之砌、紅毛人言語・文字共通し不申旨申立候義共ニハ有之間敷哉との由

① 久世伊勢守広正<sup>ニ</sup>長崎奉行。天保八年七月二十九日江戸灣に入つて砲撃を受けた米船モリソン事件と、その後の処置のこと  
で、翌九年六月、オランダ商館長ニーマン(J. F. Niebuhr)がその顚末を記した機密文書を長崎奉行に提出した。久世は(他  
国船に救われた)漂流民は中国(唐)船か、オランダ(紅毛)船によって送還してほしいとの意向を伝えるべく提案した。

内容 一、昨秋の蘭人提出の風説書の写を呈覽に供す。

- (1) イギリス船が日本行を目ざしつつある。
- (2) しかし広東にて手間取り中
- (3) 昨年来日のフランス船は、同国王の命によるものにあらず。
- (4) 天保八年「モリソン号事件」後の処置、とくに漂流民送還についての日本の方針は、フランスに拒否さる。
- (5) 右は咬啗吧(ジャカルタ)よりの情報なり。
- (6) フランス・イギリス船の日本渡来は、本年申中来年か。

- (7) イギリスは日本へ渡来して通商を要求するつもりなれど、ホンコンにて現地人との衝突あつて、延引。  
 (8) イギリス人・フランス人へ日本に渡来せざるよう、オランダ人を通じて申入れ方を求められたが、それぞれの国の

方針によりて、請合われず。

三八、(参考書翰) 嘉永元年五月三日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

\* (1)・(2)とも『事修叢書 九上』所有、但し、同前。

(1)

御別紙被成下、奉謹読候、然者、過日迭魯乙多兒船軍之図<sup>①</sup>拜見被 仰付候所、右抄訳是又拜見被 仰付、写相済候ハ、奉返上候様、難有奉存候、早々写申付候所、段々及延引、恐入奉存候、漸出来致候間、御本書ハ今日奉返上候、右御礼奉申上候、且又西洋新發明之ウアルシキート、若愚息製法書手に入候得ハ、可奉入 尊覧旨奉畏候、右者未タ手ニ入不申、折角相望居候間、手ニ入候得ハ早々可入 尊覧と奉存候、是ハ製法何分ニも未タ分り兼候様奉存候、薩州ニ而も、少々手ニ入候様も承候所、製法難分様子、猶以手寄何レニハ手ニ入候様仕度奉存候、委細被 仰出候趣ハ奉承知候間、此後入手次第可入 尊覧と奉存候、其趣ハ愚息へも申聞置候

一、旧冬唐人<sup>△</sup>之申出ニハ、英夷<sup>△</sup>日本交易ノ義懸合候処、唐人申候ニハ、国王ニ而申付候事故、銅交易いたし候得共、引合不申云々申候得は、夫ニ而者無益の事故、英国にて申聞候上ニ而、日本交易ハ為切可申と申候よし、虚実ハ不相分、計策之程も難相分、弥交易相止候ニも致せ、英国計も無之義、又異国不来共、御備ハ常ニ嚴重ニ相成居候而惡敷事ハ無之様被思召候由、委細奉拝承、恐乍御同然ニ奉存候、常々嚴重ニ相成居候得ハ、無此上、別而英夷等交易相止候ハ、猶更弥此御閑暇幸と、十分ニ御備ヲ被附置候得者、此後ノ御為可然、いつれ火急ニ被遊候事ハ

何歟落候事も中々ニハ可有之間、何卒く一刻も早く御備ハ御附被置候様ニハ、暮々乍恐奉存候事御座候

一、朝鮮へも廿艘計来り候よし、尚又秋田杯も引張有之候哉、何歟抜荷ニても有之歟、異船も来居候歟ニ御承知被遊候由、又松前へも度々異船見候由被遊御承知、何等珍書手ニ入候ハ、被遊御承知度旨、奉畏候、格別珍書も手ニ入不申候得共、朝鮮ノ事、松前之事ハ承知仕候、秋田一條ハ未タ承知も不仕、又何等承り次第可申上候、先ハ尊答申上奉り度、甚乱筆恐入候得共、申上奉り候、恐惶頓首

五月三日

別紙拝呈

① 迭魯乙多兒船軍之図（未詳）

内容 一、「迭魯乙多兒船軍之図」見たしとの要望、抄写の上返還せん。

一、「ウラルシキート」製法書（「三六」宗城書翰参照）のこと。

一、昨年中国人より、イギリスの日本交易要求の件につき申入れの件。

一、朝鮮、秋田、松前等への異船来船のうわさ。（三月から四月にかけて、外国船が蝦夷地、陸奥・出羽沿岸にしきりに出現していることは事実である。）

（2）別紙

再三別紙ニ申上候、かくの青まき<sup>①</sup>の事<sup>②</sup>と御尋被遊候処、餘ニ為差事も不奉承知、其内青火元ノ事ニ而少々争有之由、是ハまきニ而ハ無之、若年寄との事<sup>③</sup>ニ御座候、夫々引入、今日迄モ不致出勤、如何哉と存候処、全ク前事ハ相済、実病ノよしニ承り候、其内如何可相成哉、猶又何等承候事御座候得ハ、又可奉申上候、乍序申上候、琉国ノ事色々相尋候所、只今何もケ様と申実説も無之様子ニ候得共、是ハ密ニ相察し候処、極々内交易ニ而も致し候様とハ成行不申哉と

推察ニ御座候、修理も左様の事ハ決て口外不仕候得共、甚不審と奉存候、是ハ是切ニ御内々御承知置奉願上候、頓首  
 拝上

三日

別紙

① 青Ⅱ老中青山下野守忠長（丹波国篠山藩主）のことか

② まぎⅡ老中牧野備前守忠雅（越後国長岡藩主）のことか

③ 嘉永元年二月二十二日、江戸城西丸に接する丸の内に火災があり、青山邸のほか、老中戸田山城守忠温（下野国宇都宮藩主）邸、西丸若年寄松平玄蕃頭忠篤邸などが焼けた。牧野邸もこれらに隣接してある。老中阿部正弘邸も翌二十三日に火災にあっている（『慎徳院殿御実紀』巻十二Ⅱ『国史大系本 続徳川実紀 第二篇』）。この火元の件であろうと思われる。なお青山忠長は、七月二日に病氣のために辞職を願ひ出ている。

④ 薩摩藩世子島津斉彬

内容 一、青山・牧野らの邸の火災火の元のこと。

一、薩摩藩の琉球処置についての、種々のうわさ、特に内々外国と交易いたすや否やの件。

三九、嘉永元年六月二日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 『聿修叢書 九上』所収、但し、同前。

御密紙難有拝見仕候、乍失敬、相済候儀ハ、別段奉服不申上候、先日相願候御秘書、早速御思借被成下、重畳難有仕合奉存候、時々御入用之御書物故、早々写候而、返上可仕旨御沙汰御座候処、段々返納延引仕、甚恐縮之至奉存候、将又、二兵総説、三兵活法共、此間海運ニ而相達候間、差上申候、御慰に相成候ハ、難有仕合奉存候、御写済之上、御下被成下度奉希候

一、先頃以来、北海異舶漂沈、諸藩葬命之様子、追日罷疲、窮迫可仕、歎息之至奉存候、就中松前へハ夷人輕舸三艘、十五人乗組にて漂着、上陸仕、段々相尋候処、本船ハ於洋中難破船仕候由申出候旨、甚可疑挙動に御座候、定而委細御承知可被在と奉存候、萬一未タ不達御聴候ハ、達書面杯所持仕居候間、追々可差上と奉存候、如昨年、又々此度之十五人も、崎陽へ護送、蘭人へ被相託候御都合に可相成、右杯ハ未相分候、此頃に相成候而ハ、乍憚先年より御建白被為在候御卓論、よもや諸老も存知当り、感服可申上と奉存候、其後ハア閣へも逢不申候間、近日之思慮不相分、明日ハ伺御機嫌旁罷越、面謁口氣可相探と奉存候

一、御身辺向、近日何も不被為替候や、乍憚如何と奉存候、此度下曾根金三郎娘、御屋形へ罷上り候由、此間同人へ承知仕候、僕恐察申上候にハ、何等追々御尋被遊候御手筋之御考慮かと奉存候、殊の外難有持り居申候

一、当春御伝授被成下候、鶴血丸に相用候鶴血ハ、鳥銃杯にて打鶴の血にても宜敷や、生獲之鳥の胸をさし取候血に御座候哉、此段相伺度、且兵糧餅制方御伝来被成下候義ハ相成間敷や、先頃被下候品、時々相用試候処、甚調法に奉存候間、色々為拵候得共、何分出来兼、当惑仕候、御教示も被成候ハ、重々難有奉存候

一、為・庄共、無異壯実潜居仕候間、御放念奉願候、為常盤帶二冊、此間差越、披閱仕候処、不堪感憤、実に落涙仕、残念奉存候、將志ゆふこん当年召連候半と被思召候由、毎度御尋被成下、冥加至極忝奉存候、兩人残置候間、萬事為司弁、松ねも残置申候義御座候

一、先頃差上置候蘭書写本、御用済之上、御返却奉希候、何も急二入用と申ニハ無御座候得共、御模様相伺度、乍序奉申上候、恐惶頓首、百拝

六月二日

再度敬白、不相替乱毫不文、恐縮仕候、御推覧奉願候、已上

遠江守

景山先賢公閣下

呈侍史中

内密

- ① 「二兵総説」・「三兵活法」は「三六」註①参照。宗城の参府後、船便で領国宇和島からとり寄せたものか。
- ② アメリカ捕鯨船、五月七日、西蝦夷に漂着。幕府は松前昌広（松前藩主）に命じて、一五人の乗員を長崎に護送させた。
- ③ 下曾根金三郎信敦（甲斐守）（文化三一一八〇六―明治七一一八七四、江戸南町奉行筒井和泉守政憲次男で、西丸小姓組。渡辺華山門人で、「蛭社」の一員。高島秋帆に砲術を学び、江川太郎左衛門英龍につぐ、高島流砲術指南となる。（佐藤昌介『洋学史研究序説』一九九頁）

④ 鶴血丸、前号「三一」斉昭秘法薬法。

⑤ 菊池為三郎及び庄兵衛。（前出）

⑥ 「常陸帯」ならん。藤田彪（東湖）著、上下二巻、天保期の斉昭の水戸藩政を概観的に回想したもの。弘化元年成る。

⑦ 宇和島藩家老松根図書

内容 一、拝借の秘書（書名未詳）の礼。

一、「二兵総説」・「三兵活法」を呈覧。

一、蝦夷地漂着の外船乗組員一五人を長崎へ送るべし。

一、先年よりの斉昭の建白の処置、明日老中阿部を訪問せん。

一、下曾根金三郎娘、水戸藩邸へ奉公。

一、鶴血丸製法について。

一、兵糧餅製法伺。

一、菊池為三郎らの近況。

一、「常陸帯」を閲読、感憤す。

一、先般貸渡しの蘭書（書名未詳）写本の返却依頼。



四〇、嘉永元年六月八日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 『聿修叢書 九下』所収、但し、同前。

密御別紙奉謹読候、夫々事済候義ハ、乍恐惶、別段奉復不仕候間、御海量奉希候

一、松前届書面之儀、奉入尊覧候様御沙汰之趣、奉畏候、当春以来之分、不残奉差上候間、御写留被為済候ハ、御下ケ奉希上候、十五人之漂虜ハ過る二日長崎ヘ護送可仕旨申渡候由、阿闍直話にて承知仕候、且此前之漂客七人ハ一昨年長崎ヘ送り候由、蘭人昨秋連帰申候、尤内一人ハ発狂、崎陽にて相果申候

一、鶴血之儀、御委曲蒙御教示、難有奉存候、兵粮餅之儀も奉畏候、無止御次第二付、期好時機御伝授被成下度奉希置候

一、御秘本駿州疑問之儀<sup>①</sup>、被仰下、未タ拝見不仕候ハ、御内々御下ケ被成下候由、難有仕合奉存候、何卒御序に拝借奉願候

一、下金云々奉伺候処、御委曲被仰出候趣、奉畏候、段々厚御遠慮之程重々難有儀ニ付、下金ヘ為伺候ハ、如何計恐入、難有狩り可申、且差出候者、忠勤大切之旨共申遣候処、別紙之通返書申越、乍憚入御覧申候、被為済候ハ、被相下度、不図儀にて 公之厚き思召之处、下金奉伺、又同人心中也被為聞召候事と相成、無此上次第、於私安心仕候、乍然、当人如何之人物に候や、叶 尊慮候処如何と奉心配候、将又乍憚 尊躬ハ当今御潜居被為在候得共、天朝公辺之御為、神洲之御柱石に被為在候間、万々歳、御壮実にな被為在候而ハ不相済儀と奉存候得ハ、一小婦之為に萬一御精神坏被為替候様の御儀御座候而ハ不相成御事と、愚昧之短慮にハ奉氣遣候間、忠実之片言御聞込置被成下候ハ、無上難有儀奉存候、古人も五十前後春心発動の期也、可憫と申候得ハ、只々御様子不奉伺候処、尊躰之儀奉懸念候儀に御座候、此儀ハ三尺童子も弁別の事に候得ハ、 明賢之御方ヘ奉申上候ハ、恐怖の至奉存候得

共、僕か心中御憐察可被成下様奉希候、闇裡の一事ハ、忠臣孝子も甚難申儀、別而 明公へハ恐入候得共、無止奉  
存候間、密々申上候儀御座候、何も恐惶頓首、謹言

六月八日

宗 城 拜上

① 「駿州疑問」ハ齊昭著、一冊。徳川家康の「遺状百箇條」(自筆として久能山に所藏)の疑点を論ず。

② 下曽根金三郎ハ「三九」註③

内容 一、松前藩よりの届書、今春以来の分を呈覽に供す。

一、先般の一五人の(アメリカ人)漂着上陸民は長崎送致の命が出た旨、阿部老中の直話。

一、鶴血丸の教示に謝す。

一、兵粮餅につき、教示伝授を待つ。

一、「駿州疑問」を拝借したし。

一、下曽根金三郎よりの書状。

一、しかし、神州の柱石となる故、一婦女子にまとわされるを案ず。

四一、嘉永元年七月八日 徳川齊昭「留飲論」、伊達宗城宛

\* 宇和島伊達文化保存会蔵、伊達家文書、『御重書目録「乙」の「御書翰類」』、状(原本)

同右所蔵稿本『御書翰類 第一卷』所収(弘化年間のところ収む)①

留 飲 論 ②

(適宜改行した)

齊昭曰、世ニ留飲といふ病多き処、古書ニ此病名を不聞、近世ニ至りて、此病尤多し、此病をわつろう人を見るに、  
多ハ丈夫なる人ニて、婦人杯ニハ少し、是を以考るに、丈夫なる人ハ、丈夫ニまかせて酒色を過せ共、血氣の節は障  
る事もなけれハ、追々年を重ねても、年を重ねる程ニハ心持は相違せざるか故、自ら四十五ニ至り、此病を引出す

事也、血氣の壯年ニハ少し、兎角卅  
以上ニして出る病と思ふなり

扱此病を引出す時ハ、何程丈夫の人ニても難義するが故、様々薬用すれ共功なきが故に、牡蠣・紅螺杯の末ニ、沙糖を交て一と吞時ハ、即功有が故、他の薬ハ功驗無之と思ひ、しきりに牡蠣・紅螺をのミ用る事となれり、然る処、最初ハ腹ニなれぬが故ニ、一七二七用ひても即功を得れ共、追々用る事久しき時ハ、腹なれて、終ニハ十七廿七用ひても功無之様ニ相成共、外ニ良薬なきと思ひ、しきりに多く用事ニ相成処、元より牡蠣・紅螺は腹中へ多入てハ、薬と成品ニあらず、只則時痛を去る迄ニて、多用時ハ益腹中を悪くし、痛をます事なれ共、即功有之故ニ、後憂を忘れて即功の品を用ひ、終ニ死ニ至るハ世人皆如此也、又此薬を不用者ハ、水を下す也

其薬といふは

マクネシヤ舶来を一匁、鼠ツリシ季子黒梅モド五分計  
上とす

右の末薬を五ツ計ニ分て、其一ツを一日ニ一度用ル尤下り過る時ハ減し、又不下時ハ、時ハ、必水る者也、乍然、何程留飲ハ腹中の溜水といへ共、久しく如右腹内ニ有之時ハ、地凹なる所へ雨水溜りて一ツの沼と成か如く、腹中ニ可有水ニなりたるを、俄ニ下す時ハ、又夫たけの水腹中になくてハ不叶故、たとへハ一升下せハ、其腹ハ乾燥して、又一升だけの湯水を吞ハ、旧水と新水と入かハると、今迄ニて下したるだけの損也、但、人ニよりてハ、前文の薬を程能用ひ其人ニよりて、よく治すも有れ共、扱又四花の灸を日々百挺つゝもする時ハ皆一様ニよきといふニハあらず

世人皆先見なきと不決断ニて、或ハ牡蠣・紅螺等用ひ、又ハ右の末薬等にて水を下すニのミ心を用ひ、其本へ立かへりて養生する事を忘るゝ故、何程薬を用ても、可治筈ハ無之、尚腹内へ入て不為の紅螺等、即功あるニ斯れ、多く用ひ、終ニ死ニ至るは可惜、且あさましき事ならずや、依其本ニ立かへり考たる上ニて、薬をも用るハ格別の事ニて、其本ニかまらなく只薬のミ用てハ、逆も功能有べき筈ハなき事也、其本といはゞ、父母よりうけ

<下げ札(1)>

得たる留飲ニハあらず、故ニ乳を吞赤子ニ留飲有事を聞ず、扱留飲ハ腹中ニ惡水の溜る故也、其惡水の溜るハ、通利の不宜より溜る也、通利の不宜ハ、水のさばき惡しき故也、さばきの惡しく相成ハ、其本ハ腎の臟の惡しく相成たるにて、腎の臟をそねたるハ、男女の道過たる事有之が故也、男女の道過て、腎の臟を損ずれ共、飲食ハ常の通りなれハ、自然と水の溜る筈也、故ニ留飲となり、又ハ脚氣となる也

扱腎の、臟をそねたる時ハ、五臟六府共ニ惡しく相成共、膀胱と大腸の惡しく相成たるハ、目ニ見ゆる故、惡しく相成たるも分れ共、其他ハ、外ハ見えざる故、不分也、今ハ腎虚せされ共、先年虚したる事有之時、右の病症ハ生したる者にて、腹中ニこり生るも、俄ニ出来たるニハあらず、されハ、追々ニ出来たる物を、俄ニ去んとする時ハ、却て身ニ障る故、其根本を考へ、追々ニ病大く成たるを、俄ニ去んとするハ、たとへハ、家の間に穀・杉の出たるを、二葉の節俄ニ去むとて根切する時ハ、其家迄も打ひしくべし、左様の時ハ、簪たしきにハかへ難き故、先枝葉を打落し、梢の方より、追々切外ハなき也、如其病も、品ニよつて留飲扱俄ニ去んとせハ其害身ニ及也 男女の道を遠くし、酒ハ勿論、湯茶共ニ一切食事の外ハ不用、日々黑豆百粒ツ、吞時ハ、腹内へ溜る水小くして、外へ取水多相成故、自然と腹内の惡水終ニ拂ひ終ずべし、扱是まで日々吞たる湯茶を俄に不吞時ハ、十日計の間ハ甚指支る者也、然れ其、又なる、時ハ、左程ニも無之事也

扱又湯茶を不吞して指支不申程ニするも、其本を押して見る時ハ、腹内の乾く故ニ、湯茶を不吞ハ指支る事故、不乾仕法をすべし、其仕法といふハ生牛乳又ハ白雪膏白雪膏ハ「ボウトル」の事也、近来長崎にて多く出来る処、我ニ名を付常々用べし、是ハ油故ニ内を潤し、渴を止る故、常々用る時ハ、湯茶なくして指支ハなき事也、又渴く時ハ白雪膏をなせて用を済すべし、是を常用る時ハ大小用の通利もよき也、統て人の生る、氣と血との二ツにて、又能食して能通る、外の養生ハなき事也、故ニ白雪膏ヲ常ニ用ひ、又食事の菜ニも胡麻抔統て油けの有物を食する時ハ、肉を潤せて渴を止る故、湯茶を不吞候てもさのミ指支る事ハなき事也、但し、小給の人にて、生牛乳・白雪膏抔力ニ不及共、右の心にて油有る物を食すべし、己在國中鷹ニ出之時、明七ツ頃朝食して、夜五ツ頃城へ帰るニ、弁当不用、湯水一切不吞事度々なり、弁当行違たる事も度々也、先を不定して、先ハ先へ

廻りすれハ行違也、尤腰兵糧ハ、いつも付れ共、試ニ不食、又水は何れニも有共、不吞して指支ハ無之りき、尚又、退隱後向岡ニ在て、今年ニて五年なれ共④、食事の間ニ湯茶を吞し事一度もなきハ、全く白雪膏等常ニ用ひ、日々水のみあびて、湯ニ不入、又寒中もコタツ杯へ不入ハ、内の乾く事無之故と思ふ也、不乾ハ吞量少く、吞量少ければ、留飲も、脚氣も可出よしなし、我身ニて試ニ人も亦同様なるべし、又何程油よきとても、鯨杯多日々食ハ以の外也、

統て鳥獸の肉よりハ魚肉ハ重し、殊ニ鯨等の肉、常多食する時ハ、人ニより惡病をも引出すべき也、右様内の潤ふ様ニ

して、兎角湯茶を不用、乾燥の節ハ白雪膏をなめ、或ハ冷水ニてうがいし拭して、湯水を不吞工夫し、朝々冷水をあ

びて、風呂ニ不入、且毎朝黑豆を吞、男女の交りを節ニする時ハ、不治してハ不叶事也、古今共ニ色欲ハ同しとハい

へ共、禽獸さへ時有之て交るニて見る時ハ、古人ハ正直ニして、食ハ命を續くる為、色ハ子孫をもうくる為と心得た

らん故、葉杯ハ今の如くなけれ共、身の養生ハよく、長命せしと見えたり、来世ニ至る程物事開け、古ハ不食品迄

も食さるゝ様ニ成り、又難病も治する良薬出来たれ共、能考る時ハ、不食してもよき品を、色々ニして食さるゝ様ニ

考たるニて、元々左様の品ハ不食しても事足と思ふ程の事也、され共凶作等の事も有之ハ、考付たるを惡しきといふニハ非ス

又良薬も様々出来たれ共、葉を頼ニ不養生すれハ、無ニハおとる程の事也、され共、良薬を考たる者ハ、人の為なれハ、あしきといふニハあらず 又男

女の道ハ、子をもうくる為なれ共、事開るに任せ、子孫を廣むる為ニハ無益の事ニも有べく、夫か為ニ交ニ過て、腎も

虚す様ニ成べし、兎角其本ニ立かへりて、男女の交ハ子をもうくる為、食物ハ命をつゞくる為、葉ハ養生して不叶節

の為とさへ思ハ、古人の如く長寿の者も有べき事なり、今世人一統なれ共、客杯ニ食を強、酒を強る開閑えぬ事也、如何

不食してよき故、辞退するを何程加減よきニもせよ、亭主が無理ニ強るといふハ如何也、畢竟食ハ命の為と言事を不知故也

扱右の如くなれハ、一日も早く其本を考て、大く病の不成中ニ治し可申事ニて、大木と成てハ根切ハ成兼る事也、

乍然最初癖囊にて、積の如く腹中に按する鼠の入たる如に廻りあるく症ニ、千金當帰湯など無驗桂枝加苓木、加減等も

無驗者ニ用ひ、安中散と云者を用、甚有効、元来症ニ似て異なる病症也、先食事を減させ、一日ニ米一合程をかたき粥

に煮て、六度程ニ用させ、其外の食する物、飲物は一向に禁し、兎角中を乾すべし、癖囊ニ成てハ甚めんとす也、故

ニ左なき中ニ早く養生して治さしむべし、統て病ハ若き中を直すべし、宿病と成時ハ不容易事也

安中散方 成たけ飲を禁し  
又房事を禁す

延胡分五 良姜分三 茴香分五 蠣粉一錢 桂枝分五 甘草六分 永三分

右之方長服す 一日一帖宛ニテ佳也

又癖癰方

半夏大 茯苓大 甘草小 乾姜小 青葉藿香中

右水一合五勺入、一合煎服

右之外ニモ、我家方有れ共、前々記る如く、養生して癖癰ニて不至様ニする事肝要也、前二いふ如く、○飲食ハ命を續くる為の物、○房事ハ子をもうくる為、女を使ハよし、女ニ使ハるゝ故、人々腎を損る事也、酒は少しく飲ハ藥也、酒に吞るゝ故、其身を損るなり 此所を忘るニおいては、何程の良藥を用ても無益なるべし、右ハ筆序故認る也

七月八日夜

尚又序ニ曰、世人養生とさへいへハ、定食とて、たとへハ朝三盃、昼三盃、夕三盃杯飯の数を定るを定食なりとて、養生と思へ共、我か説とハ大ニ相違也、愚説ハ、食は定る時ハ如右定る事も成べけれ共、於今日の事ハ或ハ弓馬槍劒等、又ハ遠馬・遠足等ニて身を働時もあり、又は終日机ニよりて書を見る事も可有之、然るニ食のミ数を定るハ不相当也、されハ食し度時ハ十分ニ食し、又不進時ハ不食、腹ニ任するをよしとす、されハ世間ニていふ定食ハ、食のミにて、於実事ハ不定にて、不定ハ則定食也、尚若年々養生等ニ心を用る時ハ、必短命すべし、兎角腹ニ任するがよき也、若きより養生杯ニ心を用る時は、老て養生の仕方もなく成也、只血氣の節ハ房事の養生專一也、脚氣杯ニ心不付して、房事するが故ニ、皆命を失ふ人多し さて又大食も折ニハよき也、左なき時ハ、食の袋つまりて、却て脾胃の不為也、さりとして

常々大食ハ尚惡し、兎角天ニ斯たがひ、腹の加減ニ任する程の養生ハなし、不進を強て食するハ、尚以惡し、房事も同断なるべし、燈下乱筆、文字誤落字等も有べし、推覽後火中へ

(下げ札) (1)

「病を治すハ、先見と決断とが大切也、遅速ハともあれ、生る物終に死すしてハ不叶事なれハ、同じ死るならハ病ニまけて殺されん、自ら死んと思ひ定て、脚氣・留飲・水腫の類ならハ一切に吞物をたちて、死んと思ふ時ハ何程不吞しても小水ハ通る故、自然と病ハ治す訳也、是志士の戦場ニ出て、同じ死るならハ名をあげて死んと思ふ心ニ同し、さて又世人右程ニ不相成とも、たとへハ勝手を取直さんハ、入をはかりて出す事をなす外なき処、本文病を治さんハ、右ニ反して出るをはかりて、入る事をなせハ、自然治すべし、尚父母よりうけ得たる病ニあらす、自分不養生等ニて引出したる病なれハ、本へ帰らぬといふ事ハなき筈也、先見と不決断ニて、医藥のミをあてとし、病発る時ハ医藥を用、少しく快時ハ止、養生にかまハぬ故、不治事ニて、皆上へのミにて、其根をのこし置故、再起もする事也、不決断故也

(下げ札) (2)

▲「いふは氣血ニ勝故也、又大食して眠く成といふハ、血氣ニ勝故也、眩と眠なるとは、譬へハわき立たる釜の蓋を取ハ、氣発か如也、又眠くなるいふハ、蓋をする心也、此氣と血との理を心得て養生ハすべき事也、兎角天理ニまかせぬれハ、自然血と氣とを養ふ処ニ相当する也

註、「御書翰類 第一卷」では、▲の前に、次の文章がある

「氣と血との説、譬へハ食物ハ乳にして血也、皆食して血と成り、油となる、<sup>ノ</sup>かす大小ニ出る也、依甚しく空腹する時ハ、眩と

(下げ札) (3)

「女を召使者ハ子孫を広め、女ニ使ハる者ハ其身を亡す、酒を少しくなさんハ、身之養生ニ成リ、酒ニ呑るゝ者ハ身を亡す、臣を使の君ハ賢君ニして、其国富国強兵となり、臣ニ使ハる君ハ闇君ニして、其国柔弱ニ成て、終ニ其不道理ハ皆一なるべし」

① 本書の「七月八日夜」という日付けを、「退隱後向岡に在て今年にて五年……」という本文中の記述(弘化元年五月六日致仕)及び本年八月九日付伊達宗城書翰(斉昭宛)(次稿に掲載予定)の文言から判断して、「嘉永元年」としてここに置く。

② 留飲||胃の不消化、胃座過多症。

③ 白雪膏||「ボウトル」||バター

④ 退隱||弘化元年五月六日致仕、以後五年目が弘化五||嘉永元年、本年となる。

四二、(参考書翰) 嘉永元年七月二十二日 伊達宗紀書翰、徳川斉昭宛

\* 『聿修叢書 卷九』所収、但し、同前。

以別紙奉申上候、阿芙蓉御書物、愚息へ拜見被仰付、私も拜見仕候哉、蒙 仰奉拜承候、近頃拜見仕居、未相終候得共、禁微易救未難与申処ハ、至極之義ニ而、次第くニ相長候上ハ、事六かしく相成候、丁度御書物之意、奉感服候、依而相考如何、本朝此節之事情甚大事と弥奉存候事ニ御座候、扱又只今夷船渡来ニ而も致候時ハ、閣下ニ而如何可被遊哉、御隠居之 御身上なから、御為被恩召候而ハ御寝食も不被安、百人一首之人もをし之詠歌被恩召出候由、逐一奉謹承、乍恐 御心中之程奉恐察、御尤之御義、不肖之私体迄も実ニ相考候程無際限、不安心之至奉存候、所詮當時ノ御模様中く愚不肖考も付不申、心附御座候共可仕様無之、只氣支上候計ニ御座候、私義肩痛之義蒙 御尋、重々難有奉存候、為差事ニハ無之、当年ハ近年無之大暑故歟、相障リ、過日ハ肩痛仕候処、此節ハ最早順快仕候、重々御尋



ヲ蒙リ有かたく奉存候、毎日灌水ニ而大ニ快相成候、乍恐御心易被恩召被成下度奉願上候、私年来之義も蒙 御尋、奉畏候、当年五十七歳ニ相成申候、近来ハ大ニ衰老仕、何分入組候義相障、退隠仕、老養而已相加罷在候、扱亦松前事情過日奉入尊覽候処、猶委曲之義愚息承知仕居候間、追々自是内々可奉入 尊覽様申伝置候、弥只今之如ニ而も相濟申間敷、誠ニ此度ハ 公辺御手ニ相成不申候而ハ、所詮相成申間敷、扱左様相成候而も、此後之処ハ余程御大事と奉存候、実ニ此一挙ニ而善惡之機相分候義、此処ニ而別段之考有之人ハ無之哉、聞老衆等も埒明ぬ様、乍恐奉存上候事御座候、先ハ過日之御礼、再尊答申上度、奉呈愚翰候、恐惶謹言

七月廿二日

① 「阿芙蓉集聞」 〓 「三六」 宗城書翰、註②。

② 人も惜し 人も恨めし あじきなく 世を思ふゆゑに もの思ふ身は、「小倉百人一首」の後鳥羽院の歌。

③ 「四〇」 宗城書翰にあり。

内容 一、「阿芙蓉集聞」 息（宗城）ともども拝見。

一、隠居中ながら、夷船来舶を案ずる斉昭の心中を察す。

一、自分（宗紀）も五七歳、肩病等あり、衰老仕る。

一、松前事情の処理を案ず。

四三、嘉永元年七月二十二日 伊達宗城書翰、徳川斉昭宛

\* 『聿修叢書 卷九』所収、但シ、同前。

一、松前之義、入道<sup>①</sup>申上候ニ付、尚又御高慮之处御教示被成下、重々難有仕合奉存候、折角此度ハ志摩守<sup>②</sup>一身に係り候義にも無御座候得ハ、中々愚昧之僕輩不及思慮儀、迎も彼是と家政向相続人坏之世話ハ不行届義にて、蝦夷地

之存亡、松前家之安危、此一挙と奉存候間、為何儀も取極候而ハ難申儀御座候、其上松前家とハ親類と申にも無御座、全志摩守より乍不肖心添相願候ニ付、一身之切磋仕候位の儀御座候得ハ、外他之愚生环一言可申述様も無御座奉存候、乍然、如此内乱相起候儀を沈黙仕居候時ハ、実に 天朝・公辺之御為不可然、且今之内移邑ニ相成候而、蝦夷地ハ別段充実之御手当被為在事と奉存候丈ハ、委曲愚意、当月初旬ア閣へ相話置、其後尚又書通にて内々書面為見、序に別紙の通り申遣候儀に御座候、此上ハ公議如何と相伺居計に御座候得共、定而苟安姑息の御処置に可相成と奉存候、何卒如 尊慮高明之御決断被為在度と奉企望居申候儀、御座候

阿閣へ遣候舌代覚<sup>③</sup>

秋暑猛烈候処、愈御勝常御精勵御勤と存、奉大賀候、拟過日ハ不時参殿、乍御多擾中、早速御逢被下、忝仕合奉多謝候、不相替出位之妄說申上、恐縮此事御海量可被下候、其節御密話申上候儀も、種々御配慮被尽可被下と奉深謝察候、何分天下之御為可然御処置有御座度奉希候、此間貴館罷出<sup>④</sup>松泉州へ罷越面会、松前一条内話、半途ニ而御太鼓に相成候ニ付、明朝又罷越申候、定而其後御話合可被成と奉存候、且又貴約申上候、山田三郎へ為念外記<sup>⑤</sup>相尋、同人より密々差越申候書面、内々呈電覽候、相濟候ハ、松泉州へ御廻しの末、御返却可被下候、松前儀此間も申上候通り、此儘ニ而被置候而ハ 神洲之一大患と可相成ハ必然之儀ニ付、何卒移邑被仰付、只今之内御引上ケ、上ニ而御充実、夷氏御撫育修繕得御嚴備被為在、天下永世之御処置被遊れ度事と奉渴望候、松前家備向不行届儀ハ御掌握ニ付、別段不申上、実ニ海防人数と申而も、表向御達向計立波ニ候得共、内実ハ請負人杯かき集め候様之者にて、何事そ有之時ハ顛倒潰乱無相違事と奉存候、養子之儀も泉州へハ先ツ相話申間敷やと相伺候処、何れ御建白之儀被為在候得共、先ツ矢張可相話旨被仰聞候間、明日可相話と奉存候、拟寛之進儀如何様之非常英勇にも致せ、養子之身分先々ハ乍病乱

志摩罷在、如何体見かきり候とも、旧臣共志摩ニ付何分ノ之勝手を好ミ候者多く、寛之進へ付候ハ有志計にて、有志ハ稀少、奸人ハ多夥之儀、寛之進英勇なれハ内乱生レ、人氣をおそれ、平隠無事之取計仕候ハ、矢張挽回ハ不出来、是迄同然の申内、他人を入候丈一弊相加候位の儀、所詮松前家北鎮之任御座候間、養子も甚六ヶ敷候得共、換地山陰不樞要の地に居候ハ、太抵之凡主にて血脉の者相立候方可然、却而変事有之後にてハ如何之不調法出来候も難計、松前家之為にも只今之内転移被仰付候方難有事ニ奉存候、別紙入電覽候ニ付、此段尚可申上奉存候  
松泉州へハ、四日ニ参候心得之處、彼方支候ニ付、六日に罷越候儀御座候

(徳川斉昭註記)

「七月八日入道ノの書を見候故、入道並遠州へ愚説申遣候所、尤ニ存候義と相見え、養子の義ニして、統て我等申遣候通り阿へ申遣候よしにて、下書拝見候故、密封ス

此三枚、七月廿二日来ル

「

- ① 入道ニ伊達伊予守入道宗紀(春山)
  - ② 松前志摩守昌広(松前藩主)、天保十年、十四歳で家督を嗣ぐも、病身、一方、先々代の祖父章広弟内蔵広当(広純)が国家老として実権を握っていたが、同十三年、親族の松平和泉守の忠告で、罷免された。しかし、その復活の動きがあるなど、その後も内訌が絶えない。
  - ③ 伊達宗城の老中阿部正弘宛建言
  - ④ 西丸老中松平和泉守乗全(三河国西尾藩主、のち嘉永元・十・十八、老中に転ず)
- 内容 一、蝦夷地の伴は松前侯の責任。

- 一、松前氏を内地ニ山陰のへき地に移封すべし。
- 一、その旨阿部老中へ建言す。

本稿は、「昭和五十三年度文部省科学研究費総合研究(A)」の成果の一部である。